妊娠中における夫婦関係満足に関連する要因の検討

A study of factors associated with marital satisfaction during pregnancy

浦山晶美*, 田中和子*, 白石佳子*
Akimi Urayama, Kazuko Tanaka, Yoshiko Shiraishi

キーワード：夫婦関係満足度、自尊感情、特性的自己効力感

要旨

育児困難や不適切な養育態度は多くの要因が絡み合って発生するが、その中でも夫婦の関係性は大きな影響を及ぼしている。そこで本研究は妊娠中から子育て支援の方向性の一助を得ることを目的に、夫婦関係満足に関連する要因を検討した。特に、夫婦関係満足と子育てに及ぼす要因として考えられている自己効力感・自尊感情、そして妊婦の基本情報等についての関連性を明らかにした。研究対象者は、A 県にある産婦人科病院の母親学級に訪れた妊婦 140 名である。調査内容は基本的情報として年齢、結婚後年数、仕事の有無、妊娠週数および妊娠中の異常の有無である。子育てに関連する要因として使用した尺度は、夫婦関係満足、自尊感情、特性的自己効力感である。分析方法は Spearman 順位相関係数を用いた。結果は、夫婦関係満足に有意な相関関係が見られたのは自尊感情（r=.39）、特性的自己効力感 (r=.28)、結婚年数 (r=-.20)、妊娠週数 (r=-.20) であった。先行研究から産後うつ病と妊娠中の自尊感情・自己効力感には関連性があることから、夫婦関係満足を高める支援は、産後うつ病を予防する可能性に繋がることが考えられた。

Abstract

There are many factors that create difficulties in child-rearing, especially the nature of the relationship between wife and husband resulting in poor attitude toward raising the child. This study, therefore, examined the factors which are related to experiencing marital satisfaction during pregnancy and assessing the usefulness of this information for making maternity care more responsive to the mother’s needs. 140 pregnant women attending maternity class in a private clinic in A prefecture were recruited, with their consent, for the research. The Survey questionnaire included basic information such as age, duration of married life, job status, number of weeks of gestation and the presence of any abnormalities during pregnancy. A clear correlation was revealed between marital satisfaction and especially self-efficacy, self-esteem, and the basic information about the pregnant women. The Spearman ranking correlation method was used for analysis. Results showed that marital satisfaction was significantly correlated to the self-esteem (r=.39), generalized self-efficacy (r=.28), married years (r=-.20), and weeks of gestation (r=-.20). Previous research showed that post-partum depression is correlated to self-esteem and self-efficacy, therefore, it is suggested that to improve these two variables, making improvements in marital satisfaction could make a singular contribution to the prevention of postpartum depression and reduction in its incidence.

Key words

marital satisfaction, self-esteem, generalized self-efficacy

*山口県立大学看護栄養学部看護学科
*Department of Nursing and Nutrition, Yamaguchi Prefectural University

緒言

「健やか親子21」における子育て支援の基本理念は、豊かな人生が送れるように個々の親子を支援することにある。主要課題の1つとして「子どもの心の安らかな発達の促進と子育ての不安の軽減」を掲げ、子育て不安や産後うつ病の延長線上にあると考えられる虐待への対策を柱とし、妊娠中からの支援が取り組まれている。育児困難や不適切な養育態度は多くの要因が絡み合って発生し、その中でも夫婦の関係性も大きな影響を及ぼしている。よって、夫婦関係に満足する要因について検討する必要性があると考える。

先行研究によると、夫が育児に協力しても夫婦の対話時間が短い場合や夫婦関係に満足していない場合、夫の協力に満足している母親が少なく、また育児肯定感も低い[1]という結果がある。また、夫からのサポートが多い母親は、育児への否定的感情が低く、また、自己の肯定的感情は高いという調査結果がある[2]。母親の「育児適応」に関連する要因として「自尊感情」があり、産後のうつと自己効力感の強い関連性も指摘されている[3]。妊娠中における研究では、夫婦関係に不安がある場合は妊娠期においてうつ症状につながりやすく[4]、夫婦関係に関連する要因として、「パートナーの受容」、「経済・生活の充実」、「夫の支援・信頼」、「良好な人間関係」、「出産・育児への期待」等が報告されている[5]。

先行研究からも明らかにされているように夫婦関係に満足している場合は、夫婦間のコミュニケーションに好影響を及ぼし、お互いのサポート関係が成立し、母親の育児負担も軽減されている。そこで、本研究は子育て支援の方向性の一助を得ることを目的に、妊娠中の夫婦関係満足と育児適応に関連するといわれている自己効力感、自尊感情、および母親の属性との関連性を明らかにすることである。

研究方法

1．研究デザインと研究対象者および期間

研究デザインは相関関係検証型・横断的研究で、A県にある産婦人科の母親学級に訪れた妊婦140名を研究対象者とした。調査期間は2007年7月～2008年7月である。

2．分析方法

解析にはMicrosoft ExcelとSPSS18 for Windowsを用い、相関についてはSpearman 順位相関係数を用いて有意水準は5%（両側検定）とした。

3．調査内容

基本的情報として年齢、結婚後年数、仕事の有無、妊娠週数および妊娠中の異常の有無である。子育てに関連する要因として使用した尺度は、夫婦関係満足、自尊感情、特性的自己効力感で、いずれの尺度も日本語に翻訳されている。次に、用いた3つの尺度について説明する。

1）夫婦関係満足[6]

夫婦関係満足尺度はノートン[7]が1983年に、夫婦の関係全体の良さ（goodness of the relationship）を反映する項目に限定して作成したQMI（Quality Marriage Index）を翻訳したもので、1次元の6項目の質問尺度である。主婦293人、年齢23～45歳、結婚後年数1～23年、平均2.2人の子供をもつ者を対象にして行った調査[8]の結果では、平均得点18.3、標準偏差3.8、で得点分布は正規分布となっている。尺度の信頼性は、主成分分析において第1主成分の負荷量が.80～.89で、α係数は.93と高く信頼性は高い。得点の合計は6点から24点に分布する。

2）自尊感情[9]

自尊感情尺度はローゼンバーグが開発したSelf-Esteem尺度の日本版を星野が修正したものを使用した。これは10項目から構成されている尺度である。内容は、他者との比較により生じる優越感や劣等感ではなく、自己への尊重や価値を認める程度のことを自尊感情としてとらえている。自尊感情が低いということは、自己否定、自己不満、自己軽蔑を表し、自己に対する尊敬を欠いていることを意味する。構成概念妥当性の因子的妥当性は確認されている。得点の合計は10点から40点に分布する。

3）特性的自己効力感[10]

一般に自己効力感には2つの水準があり、1つは具体的な課題や場面の行動に影響を及ぼすような自己効力感である。もう1つは、特定な場面や課題に依存しないある種の人格特性的な認知傾向をみる特性的自己効力感[11]である。本研究は、人格特性的な認知傾向と夫婦関係満足の関連性を明らかにする目的もあり、シェラーらが作成した尺度を成田らが翻訳したものを使用した。使用した尺度のα係数は.88で信頼性は高く、年齢の差でも安定した1因子構造で妥当性はあると考えられている。得点の合計は23点から115点に分布する。得点構成概念的

妥当性は、抑うつ性尺度（CES-D）とは有意な負の相関関係が認められている。

倫理的配慮

所属大学（調査期間当時石川県立看護大学）の倫理審査委員会の審査を受け承認が得られた後、研究依頼施設の施設長に研究目的を口頭と紙面により説明し、署名による同意を得た。母親学級に訪れた妊婦に研究目的を説明し調査票を直接手渡し、回収により同意が得られたものとした。また、調査に協力しなくても一切不利益を被ることが無いことを説明した。

結果

１）対象の背景

調査期間中、妊婦にとって初回の学級参加時に調査票を 140 人に手渡した。回収率は 100％であり、その内有効回答は 129 人（有効回答率 92%）であった。以後、有効回答について述べる。対象者の初経産婦別では初産婦 104 人（81%）、経産婦 25 人（19%）で、平均年齢（30.1 ± 4.1）、平均結婚年数（2.5 ± 2.3）、平均妊娠週数（29.1 ± 4.9）、であった。また、妊娠経過に異常があった者については、便秘などのマイナートラブルが主で妊娠継続に影響を及ぼすものはなかった。対象者の基本的情報は表１に示す。

２）夫婦関係満足・自尊感情・特性的自己効力感の尺度得点

対象者の夫婦関係満足尺度得点の平均値は（21.6 ± 2.6）、自尊感情尺得点の平均値は（26.0 ± 4.7）、特性的自己効力感尺度得点の平均値は（71.9 ± 11.2）であった（表２）。

３）夫婦関係満足とそれぞれの変数の相関係数

夫婦関係満足に1%水準で有意な相関関係が見られたのは自尊感情（r=.39）、特性的自己効力感（r=.28）であり、5%水準で有意な相関関係が見られたのは結婚年数（r=-.20）、妊娠週数（r=-.20）であった（表３）。図１に夫婦関係満足に有意な相関関係にある変数を図で表した。

表１．対象者の属性

(n=129)

	平均値(SD)	最小値と最大値
年齢	30.0(4.1)	20～43
結婚年数	2.5(2.3)	2～10
妊娠週数	29.1(4.9)	14～39

初産婦	104 人(81%)	経産婦	25 人(19%)
妊娠経過中の異常	便秘などのマイナートラブルで、妊娠継続に影響を及ぼすような異常はなかった。		

表２．夫婦関係満足・自尊感情・特性的自己効力感の尺度得点

(n=129)

尺度	平均値(SD)	最小値と最大値
夫婦関係満足（6～24）	21.6(2.6)	12～24
自尊感情(10～40)	26.0(4.7)	13～39
特性的自己効力感(23～115)	71.9(11.2)	40～97

表３．夫婦関係満足度とそれぞれの変数の相関係数

	夫婦関係満足度	自尊感	特性的自己効力感	年齢	結婚年数
自尊感	.39**				
特性的自己効	.28**	.63**			
年齢	-.09	.09	.10		
結婚年数	-.20*	-.16	-.11	.41**	
妊娠週数	-.20*	-.11	-.16	-.11	-.05

**p<.01, *p<.05

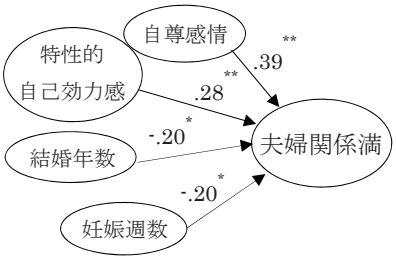

図１．夫婦関係満足とそれぞれの変数の相関関係図

考察

１）夫婦関係満足と自尊感情・特性的自己効力感の関連性について

本研究結果から妊娠中の夫婦関係満足と自尊感情・特性的自己効力感に1%水準で有意な相関関係があった。すなわち、妊娠中にこの２つの変数を高める支援は、夫婦関係満足を高める可能性があることが示唆された。また、これまでの研究においては産後うつ病と妊娠中の自尊感情・自己効力感には負の関連性があることから[12]、妊娠中より夫婦関係満足を高める支援は間接的に産後うつ病予防にも効果があると考えられる。

以前われわれは、妊娠中の母親を対象に「Virtues Approach を取り入れたマタニティークラス」のプログラムを編成し実践し、自尊感情と特性的自己効力感に効果があることを明らかにした[13]。Virtues Approach は、Virtues Project（以後 VP と略す）からヒントを得た美徳教育ワークショップである。VP は人間の資質である美徳の発達を支援し人間関係を改善させる効果があり[14]、継続的に実践することにより人間関係を改善させ、結果として夫婦関係満足度が上昇する効果が期待できると推測される。

２）夫婦関係満足と結婚年数、妊娠週数の関連性について

夫婦関係満足と結婚年数、妊娠週数には有意な負の相関関係があるという結果より、結婚年数が長い場合や、妊娠週数が進むにつれて妊婦の心理的な側面を視野に入れたケアが必要であると考えられる。先行研究から、夫婦にとって夫婦関係が満足していることが母親の育児適応や夫の育児参加に影響していること等[15] から、夫婦の仲が睦まじくなるような働きかけを行う、例えば両親学級の参加を夫婦揃って勧めることは大切なことである。また、夫婦関係が深まるようなイベントを妊娠中から企画し妊婦のみならず夫をも巻き込んだ家族支援は母親の産後うつ予防の効果があると推測される。そして、医療従事者は結婚年数が長い場合や妊娠週数が進むにつれて、妊婦の自尊感情や特性的自己効力感に考慮した関係性を構築する対応が望まれる。

結論

妊婦の夫婦関係満足と自尊感情、特性的自己効力感には有意な正の相関関係があり、また、結婚年数、妊娠週数との間には負の有意な相関関係があった。これらより、結婚年数や妊娠週数を考慮しながら夫婦関係が深まるようなイベント企画実施等や自尊感情・特性的自己効力感を高めることに着目する子育て支援は重要である。

引用文献

１）渡邉タミコ：父親の育児協力・夫婦の対話と母親の育児満足度との関係、山梨医大紀要、18、47-53、2001.

２）荒牧美佐子:育児への否定的･肯定的感情とソーシャルサポートとの関連、小児保健研究、64（6）、737-744、2005.

３）荒牧美佐子:育児への否定的･肯定的感情とソーシャルサポートとの関連、小児保健研究、64（6）、737-744、2005.

４）川崎 佳代子、金城 壽子、竹尾 恵子、弓削 美鈴、丸山 陽子：妊娠期うつ症状と関連要因の検討 国内１病院の調査結果から、日本母子看護学会誌 5（2）47-56、2012.

５）岩尾 侑充子、斎藤 ひさ子：妊娠期の夫婦関係に関連する要因、日本助産学会誌 26（1）、40-48、2012.

６）堀洋道監修、吉田冨二雄編：心理測定尺度集Ⅱ サイエンス社、149-152、2000.

７）Norton.R：Measuring marital quality：A critical look at the dependent variable,Journal of marriage and Family、45、141-151、1995.

８）諸井克英：家庭内労働の分担における平衡性の知覚、家族心理学研究、10（1）、15-30、1996.

９）堀洋道監修・山本真理編；心理測定尺度集１ サイエンス社 .29-31、2001.

10）前掲 9)、37-42.

11）成田健一、下仲順子、中里克治：特性的自己効力感尺度の検討、教育心理学研究、43、306-314、1995.

12）浦山 晶美、永山 くに子、大木 秀一：妊娠中の自尊感情・特性的自己効力感と産後抑うつとの関連性、ペリネイタルケア 32（6）、17-623、2013.

13）浦山晶美：心理的アプローチとして「美徳・教育プログラムの方法」（Virtues Approach）を取り入れた「マタニティークラス」の編成とその効果について、母性衛生、50、620-628、2010.

14）Popov L K、Popov D、Kavelin J：The family virtues guide: Simple Ways to Bring Out the Best in Our Children and Ourselves（1st ed）, Wellspring International Educational Foundation、Penguin Books USA, 1-9、1997.

15）佐藤 小織：初産婦の夫婦関係の評価と育児満足感を構成する諸要因の関係に関する研究　育児初期の核家族に焦点を当てて、日本助産学会誌 26（2）、222-231、2012.